

真理と創造性

スピノザの哲学における「直観知」の問題

柴 田 健 志

はじめに

スピノザのいう「直観知 (scientia intuitiva)」とは、いったいどのような認識なのであろうか。スピノザの哲学において、真理の認識とは創造にほかならないという視点から、この問題を考察したのが以下の論考である。

真理の認識が創造であるという視点は、数学的对象の認識をもとにしている。数学においては、定理が証明されるとともにその定理が述べる対象の存在が認められる。例えば、三角形という対象は、その幾何学的性質に関する諸定理が証明されることによって構成され、その存在が認定されるものである。つまり、証明という知的過程を経てのみ、数学的对象は真に存在するといわれうるのである。そのような知的過程に先立って数学的对象が存在するのではない。この意味では、認識が存在を生み出しているといつてよい。真理の認識が創造であるというのはこのようなことである。

では、この認識モデルをスピノザのいう「直観知」に当てはめたとす

れば、どういうことになるであろうか。「直観知」とは現実存在する個物の存在を真に認識することである。この認識モデルによれば、認識することは対象を生み出すことだから、「直観知」においては、個物の存在そのものが認識によって生み出されているということになるはずである。いうまでもなく、このような主張はただちに反論を受けるであろう。現実存在する事物は認識に先立ってすでに存在しているのであって、認識とはそのような対象を捕獲することにはほかならない、と。

しかし、このような反論は、真理の認識の場所を暗黙に実践的な生の次元に設定していないであろうか。そうであるとすれば、この反論はスピノザの意図と完全にすれ違っている。私の解釈によれば、スピノザは「直観知」という認識をまったく別の場所に設定しているからである。「直観知」が達成される場所は、現実存在する諸事物が相互作用を行なう場所なのではない。スピノザは逆に、そのような場所においては、真理は決して認識されえないと考えていた。では、「直観知」の場所とはどこであろうか。私はそれを、知的な生の次元と呼ぶことにする。

真理の認識が創造であるという視点から「直観知」を理解するという試みは、これら生の次元を区別することによってはじめて意味をもつ。また実際、これら生の次元の区別は、スピノザによる認識の分類の論理の中に指摘することができるものである。スピノザは人間の認識を第一種、第二種、第三種という三種類に区別した。「第三種の認識」が「直観知」である。この分類においては、「第一種の認識」だけが実践的な生の次元に置かれ、「第二種の認識」および「第三種の認識」はともに知的な生の次元に置かれていると考えられるのである。

では、知的な生の次元とは何であろうか。私の考えによれば、この次

元は『エチカ』を読解し、その証明を理解するという知的過程そのものを指す。『エチカ』を読むことで、実践的な生の次元とは異なった生の次元が開かれると考えられるのである。「第二種の認識」も「第三種の認識」も、このような生の次元から切り離して理解することはできない。

この視点から、「直観知」がどのような認識であるかを、できる限り明瞭に示すこと、私がこの論文で試みたのはそのようなことである。

1 観念の連鎖

考察の出発点として、真理の認識とは創造であるという命題の意味を、スピノザの哲学にそくして敷衍してみなければならぬ。そのために、スピノザのいう「十全な観念」について考えてみる必要がある。なぜなら、スピノザの用語法では、「十全な観念」とは真理の認識を意味するからである（『エチカ』第二部定義4）。注目すべき点は、「十全な観念」がどのようにして得られるのかという点である。スピノザによれば、「十全な観念」は他の「十全な観念」から生み出される。すなわち、真理は他の真理から生み出されるのである。この意味で、真理の認識とは観念の連鎖の過程にほかならない。

「精神における十全な諸観念から、精神において帰結するあらゆる観念は、同様に真である」（『エチカ』第二部定理40）。

では、認識主体はこのような過程のいったいどこに位置するのであるか。じつは、認識主体はこの過程にまったく関与していない。スピノ

ザにおける真理の認識とは、認識主体が意識の内なる観念を知覚することではないからである。むしろ、観念それ自体が認識作用なのである。観念とは、「画板の上の絵画のように無言」のものではないという『エチカ』第二部定理43注解に見出される有名な比喩は、認識とは内なる観念の知覚ではない、ということの意味する。また、この有名な比喩に続けて、観念とは「認識作用そのもの」であると指摘されているという点にも注意しなければならない。なぜなら、この点こそが、真理の認識においては認識主体は存在しないという、スピノザの真理論の核心だからである。

このように、観念の連鎖の論理によって、スピノザは真理の認識から認識主体というものを取り除いている。この点を鮮明に認識しておかねばならない。スピノザは、認識に先立って存在する対象が、認識主体によって適切に捕獲されることが真理の認識であるという考えを拒否しているのである。スピノザの哲学によって拒否されているこの考えを、ここでは認識に関する「主体説」と呼ぶことにしよう。これに對比させれば、スピノザの説は認識に関する「創造説」と呼ぶことができる。そうすると、「主体説」と「創造説」の相違点によって、スピノザの真理論の特徴を明確にすることができる。

認識主体という視点をとることは、認識と存在を分離するということを意味する。では、この分離はいったい何を意味するであろうか。認識はその外なる存在に対して行使されるということを意味する。それゆえ、この視点に立てば、認識がつねに存在と一致しているという保証はない。言い換えれば、認識がつねに真であるという保証はない。したがって、その保証は認識それ自体とは別に求められなければならない。認識主体

という視点をとると同時に、認識と存在の一致を確認するための真理基準が設定されなければならないのである。このように、「主体説」においては、認識が対象を適切に捕獲しているかどうかは、認識にとって外的な基準によって確認される、と考えられるのである。「主体説」の中心に位置する課題は、認識から分離されて存在している事物をいかにして捕えるかという点である。これを強調するために、私は「捕獲する」という比喩を使用している。

これに対して、真の観念が他の真の観念から生み出されるということは、何を意味するであろうか。どんな存在も、それが真に認識される以前には存在しなかったということの意味する。前もって認識の外に存在するものが、認識されることを待っているのではない。むしろ認識が存在を生み出すのである。この点について参照すべきテキストが、『知性改善論』の中に見出される。

「ある人々が、事物を創造する前の神の知性を考えるのと同じように、知性がこれまで存在しなかった何らかの新しい存在を知覚したということとを、もしわれわれが想定するならば（そのような知覚は確かにどのような対象からも生じえなかった）、またそのような知覚から他の諸知覚を法則にしたがって (legitime) 導くと想定するならば、このような思惟はすべて真であり、またいかなる外的対象によっても決定されておらず、むしろただ知性の能力と本性にのみ依存していることになる。〔知性改善論』71節）

ここでは、知性の認識に先立って存在する事物を捕獲するのではなく、

むしろ知性による認識が存在を生み出すという過程が想定されている。これが真理の「創造説」と呼ぶべき思想である。また、そのような知覚から他の諸知覚が導かれるというテキストは、後の『エチカ』においては、観念から観念が帰結すると表現されるのと同じ過程を指している。このように、認識がその対象をもたらすのであれば、それらはつねに一致していることになる。だから「このような思惟はすべて真」なのである。真理の認識とは真理の創造であるということは、このようなことを意味している。

この論点を確認するために、デカルトの真理論を一瞥してみよう。明晰かつ判明な観念は真であるというデカルトの真理論においては、観念の内的性質にもとづいて真理の保証が得られるように見えるかもしれない。しかし、この説にしたがえば、観念が与えられただけではまだそれが真であるかどうかは決定できず、それが明晰かつ判明であるかどうかを認識主体が検分することによって、はじめて真理の判定がなされることになるから、やはり明晰かつ判明という基準は認識そのものの外に設定されていることになる。

この点からスピノザの真理論を見直すと、その特徴はさらに明瞭になるはずである。スピノザは、真理の認識を創造とみなすことによって、真理の保証は、認識の外に真理基準を設定することなしに、認識それ自体によって与えられると考えた。認識が存在と一致する場合、その認識は真である（『エチカ』第一部公理6）。問題は、その一致を、認識の後からあらためて確かめる必要があるかどうかである。その必要はない、というのがスピノザの真理論の特色である。認識が創造であるとすれば、認識と存在はつねに一致しているがゆえに、この点を確かめる必要はない

いからである。それゆえまた、認識に外的な真理基準も必要ないということになる。真理の基準は真理それ自体であるというスピノザの有名な主張（『エチカ』第二部定理43注解）は、このような意味に解することができる。

まとめると、スピノザにとっては、認識に先立って存在するものが認識主体によって適切に捕獲されることが真理の認識なのではない。むしろ、認識主体ではなく、真の観念から真の観念が生み出されること自体が真理の認識にほかならない。

スピノザの真理論とは、このような意味での真理の「創造説」である。さて、私の解釈によれば、このような認識は実践的な生の次元には置かれていない。むしろ、知的な生の次元に置かれている。この点を鮮明に認識することなしに、「直観知」とは何かという問いに対して明確な答えを出すことはできない。そこで次に、この点を示すために、スピノザによる認識の分類に注目してみなければならぬ。認識の分類の論理の中に、生の次元の区別の論理を見出すことができると考えられるからである。

2 認識の分類

基本的な問題点から考え始めよう。現実存在する対象を認識するということは、いったいどんなことであろうか。「主体説」によれば、個物を概念に包摂することが認識である。すなわち、個別的な存在を同じ種類のもののひとつとして認めることが、現実存在する対象の認識であると考えられる。例えば、「これは犬である」「これは本である」。このよ

うに、認識主体から出発して考える限り、現実存在する対象を認識するということは、それを概念という同一性によって捕獲することであると考えられる。

スピノザは、そのような認識を「第一種の認識」と呼び、たんなる「表象 (Imagination)」として位置づけた。「表象」は真理の認識とはみなざれていない。むしろ、誤謬の原因であるとみなされている（『エチカ』第二部定理41）。なぜなら、認識主体という視点をとれば、認識と存在は必ずしも一致しないからである。

これに対して、「表象」という認識とは根本的に異なる認識として、「第二種の認識」という「理性 (Ratio)」の認識および「第三種の認識」という「直観知」の認識が考えられている。これらの認識においては、誤謬ということはありえない。第二種および第三種の認識は「必然的に真である」（『エチカ』第二部定理41）と明言されているのである。このことは、これらの認識から認識主体という視点がすでに取り除かれているということの意味している。認識主体という視점에代わって、認識とは創造であるという視点がとられていると考えられるのである。認識がそのまま創造だから誤謬はあり得ないのである。

このように、スピノザは「表象」を「理性」および「直観知」と根本的に区別している。同一の視点からの種類の区別ではなく、視点が根本的に異なっているのである。注目すべき点は、認識主体という視点をとる限り、真理は何ら保証されず、むしろそのような視点を取り除いて考えることが真理への道筋であるという点である。スピノザ自身がこの点を強調していると思われる。したがって、認識の分類を生の次元の区別に対応させるにあたっては、認識主体こそが考察の焦点であることにな

る。そこで、こう問わねばならない。認識主体という視点そのものは、いったいどうやって成立するのであるか。この問いに答えることによって、認識の分類は生の次元の区別とはつきり結びついてくるはずである。

スピノザによれば、認識主体の視点からなされる認識とは「不十全な観念」によるものである。そこで、この「不十全な観念」の発生にまでさかのぼっていけば、認識主体という視点がどのようにして形成されるかが分かってくるはずである。スピノザによれば、どのような観念も他の諸観念と連鎖して生じている。その限り、観念はすべて真である。だがもし、諸観念の連鎖がどこかで切断されたとしたら、どうなるであろうか。例えば、ある定理が証明を欠いて提示されたとしたら、どうなるであろうか。いうまでもなく、その定理を真とみなす理由はすでに存在しない。証明を欠いた定理など、たんなる断言にすぎないからである。ところで、そのような切断はいたるところで起こっているとスピノザはいう。この切断が「不十全な観念」の原因である。「不十全な観念」とは、諸観念の連鎖が切断されることによって、他の諸観念とのつながりを失ってしまった観念という意味なのである。

しかし、このような抽象的な説明からは、認識主体という視点の形成を示すことはできない。そのためには、ここからさらに、切断が生じる理由にまでさかのぼる必要がある。その地点で認識主体の成立をとらえることができるのである。無論、スピノザはまさにそのような地点まで「不十全な観念」を追求している。

スピノザによれば、諸観念の連鎖とは神の知性において生じていることである。無限の属性から構成される神という唯一の実体の知性は、神からものが産出されると全く同じ仕方で、それらの産出された事物を

認識している（『エチカ』第二部定理23および注解）。だから、神においては認識が存在を生み出すのだといってもよい。この論点は、『エチカ』第一部定理17注解で取り上げられている。このテキストによれば、神の知性は人間知性のように「認識される事物よりも後であったり、あるいは同時であったりすることができない」。神が認識する以前には、それらは存在しなかったと考えられるからである。この意味において、「神の知性は事物の本質および現実存在の原因である」。

神においては、すべてがこのような仕方で存在している。では、神から産出されたものに関して、どうなるのであろうか。神から産出されたものとは、スピノザの用語でいえば実体の「様態」である。人間とは、神から産出される「様態」のひとつであり、したがって人間の精神とは、神の知性において連鎖する諸観念のひとつであることになる（『エチカ』第二部定理9）。ところが、人間精神が現実存在するということは、それが神の知性の中にあると同時に、他の諸観念の連鎖からは切り離されて孤立するということを意味する。人間精神という単独の観念は、諸観念の連鎖そのものを見渡すことが出来ないからである（『エチカ』第二部定理1系）。

こうして、真理の連鎖の中にあるにもかかわらず、人間精神はおのれを独立した認識主体として設定することになる。認識によって生み出されている諸事物は、人間精神がこの連鎖から孤立することによって、認識から分離していく。それらの事物が、認識主体によって捕獲されていることになる対象である。認識が創造という過程から切り離されているがゆえに、存在はつねに認識の外に置かれ、認識されるべきものとなる。そこで、事物を認識するには一般概念という網をかけて捕獲するしかな

いわけである。ここから「不十全な観念」が発生する。

さて、考えてみると、人間が現実存在する対象に対して行使することを学ぶ認識はすべてこのような認識である。現実存在する事物は、通常は、このような諸観念にもとづいて認識されているのである（『エチカ』第二部定理29系）。では、ここからいったい何が見えてくるであろうか。

「不十全な観念」による認識がおこなわれる場所とは、実践的な生の次元であるという点、まず確認できる。この次元の特徴は、現実的な世界が認識に先立って存在しており、その世界の中で出会われる様々な対象が、認識主体によって捕獲されるという点にある。

この点から見直すと、「十全な観念」による認識の場所は、実践的な生の次元ではありえないということになる。なぜなら「十全な観念」は認識すべき対象の存在を前提しないからである。したがって、諸観念の連鎖それぞれが認識であるような場所が、実践的な生の次元とは別にあるのでなければならない。それが知的な生の次元である。この次元においては、認識主体は存在しない。むしろ、認識それぞれが連鎖していくともなつて、認識の対象である存在が生み出されると考えられるのである。では、そのような生の次元はいったいどこに見出されるのであるか。そのような生の次元は、『エチカ』の読解という知的過程そのものである。私が以下で提案するのはこのような解釈である。

3 理性の場所

スピノザが真理の認識とみなしたのは「直観知」だけではない。「理性」による認識もまた「必然的に真である」といわれているからである。そ

れゆえ、これら二種類の認識の場所は、どちらも知的な生の次元にあると考えなければならない。その場所には認識主体は存在しない。この点を踏まえ、まず「理性」の認識がおこなわれる場所について見ていくことにしよう。

「理性」とは「共通概念 (notiones communes)」による事物の認識である。「共通概念」とは「すべてのものに共通」（『エチカ』第二部定理38）のものについての概念であるが、それが何を指しているかについては、スピノザはあまり明確なことを述べていない。現実存在する諸事物がそれにしたがって存在する諸法則を指しているのが標準的な解釈で、私もそう考えている。現実存在する諸事物は、一定の法則にしたがつて存在に決定されていると考えられるから、ちょうど数学的真理が一定の規則に則って証明されるように、現実存在の法則によって諸事物の真理を認識するのが「理性」であるということになる。

とすれば、次の点に気づかないであろうか。「理性」による認識とは、まさにスピノザが人間精神について『エチカ』で試みている証明以外の何ものでもないという点に。例えば、「精神の本性および起源について」と題された『エチカ』第二部では、人間精神に関する諸定理が証明されているが、これらの定理はすべて「共通概念」による認識として読むことができる。すなわち、これらの定理においては、人間精神の諸機能が、一定の法則にしたがつて認識されていると理解することができる。この点を具体的に議論しなければならない。

この場合の「法則」とは、現実存在する人間の観察によって見出される心理学的な法則のことではない。もしそうであれば、そのような認識は「第一種の認識」であり、認識に先立って存在する人間心理という対

象を一般概念によって捕獲することにしかならない。しかし、『エチカ』第二部において、心理学的な観察にもとづく議論は、何らなされていない。では、「法則」とは何であろうか。

私の解釈によれば、スピノザのいう「神の本性」をここでいう「法則」として理解することができる。『エチカ』第一部定理16が証明しているように、「神の本性の必然性から、無限に多くのものが無限に多くの仕方で（いいかえれば、無限知性によって理解されうるすべてのものが）生じなければならない」とすれば、それら「無限に多くのもの」が生み出される「神の本性」こそ、「無限に多くのもの」のひとつである人間精神を認識する際の「法則」とみなされなければならない。『エチカ』第二部がこの定理を受けて始まっている（序文で言及されている）というこの意味はここにある。つまり、「神の本性」にもとづく人間精神の認識がここから開始されるという点が、このことによって明言されていると考えることができるのである。

この解釈をとるならば、人間精神を認識する筋道はおおよそ次のようなものになる。定理16を前提して、次に神の無限の「属性」のうち「思惟」と「延長」に着目すると（『エチカ』第二部定理1および2）、「延長」の属性において生み出されるすべてのものについて、「思惟」の属性において「観念」が形成されるという点が導かれるであろう。

「神の中には、神の本質および神の本質から必然的に帰結するものの観念が、必然的に与えられている」（『エチカ』第二部定理3）。

生み出したものを後から認識するのではない。むしろ、認識が存在を

生み出すのである。真理の認識が創造であるとすれば、神の認識こそそのような認識である。これら観念の連鎖が神の知性そのものである。人間精神はそれらの観念のひとつにすぎない。そしてその限りで、真理の連鎖からおのれ自身を孤立させ、「不十全な観念」によってものを認識せざるをえない。すでに述べた人間精神の認知構造が、こうして「神の本性」に従って認識されていく。それが『エチカ』第二部の内容である。（同様のことは『エチカ』第三部の感情論にもあてはまるが、ここではその考察は省略する）。

このように、「すべてのものに共通」であるものとは、「神の本性」あるいは「神の本質」にほかならない。実際、『エチカ』第二部定理45では、「現実存在する各々の物体ないし個物の観念は、すべて神の永遠・無限なる本質を必然的に含む」といわれているのである。その本質による認識が「理性」による認識である。それゆえ、この定理の意味を、実践的な生の次元で理解してはならない。つまり、実践の場では現実存在する個々の事物に対して、「神の本質」を見て取ることができると考えてはならない。もしそうであるとすれば、実践的な生の次元において「理性」の認識がなされることになるが、そんなことはありえない。実践的な生の次元は真理が認識される場所ではないからである。事実、実践的な生の次元においては、人間は「第一種の認識」から出ることができないという点は、『エチカ』第二部定理29系において指摘されている。

「人間精神は、自然の共通秩序によってものを知覚する場合には、つねに自己自身についても、自己の身体についても、外部の物体について

も、十全な認識を持たず、たんに混乱した、切断された認識のみを持つ」。

この引用文の中の「自然の共通秩序によってものを知覚する」という部分が、実践的な生の次元における認識を要約している。そしてその場合には、決して「十全な認識」は得られないという点が注意されているのである。これに続く注解では、「自然の共通秩序によって」という部分が「諸事物との偶然的接触によって」と言い換えられているのを読めば、この引用文が実践的な生の次元への言及であることは、もっと明瞭になるであろう。

ところで、実践的な生の次元においては、人間精神は「第一種の認識」から出られないという認識そのものは、「理性」による認識である。現実には存在する人間の認知機能を観察してそのように述べているのではない。認識に先立って存在するものを捕獲しているのではなく、人間精神に関する定理の証明が連鎖することで、人間精神の真理が形成されていくのである。証明以前には、誰もそれを認識することはできなかった。人間精神の真理は、観察や実験によってではなく、証明という知的過程の中で顕現するのである。

では、「理性」はどうかであろうか。人間精神には「理性」による認識ができるという点は、やはり証明されなければならないのではないか。無論、そういうことになる。実際、「第一種の認識」に関する定理の証明が定理31で終了すると、スピノザは直ちに「理性」に関する諸定理の証明を始めるのである。定理32から定理40までが「理性」に関する定理である。

これらの証明の流れを整理すると、おおよそ次のようになる。神にお

いては文字通りの意味で認識が存在を生み出すと考えられるがゆえに、「すべての観念は神に係る限り真である」(『エチカ』第二部定理31)。ところで、人間精神の中に十全な観念があるとすると、十全な観念とはもともと神の思考過程なので、すべて真である。対象がまずあって、それを後から捕獲するのではなく、認識が対象を作り出すのだから、真でしかありえないのである。「われわれの中において絶対的なあるいは十全で完全な観念はすべて真である」(『エチカ』第二部定理34)。

ということは、いったいどういうことになるのであろうか。真理を認識する限りにおける人間精神とは、神の知性における観念の連鎖の一部分であるということになる。しかし、人間精神とは、もともとそのような連鎖からおのれを孤立させた存在ではなかったであろうか。無論そうである。またそうでなければ、「不十全な観念」など発生しない。だとすれば、ここには明らかな矛盾が生じている。人間精神は神の知性の連鎖の一部であり、かつそうではないといっているわけだから。したがって、これらを両立させ、矛盾を解消しなければ、「理性」の認識の証明は完了しないであろう。

そこでスピノザは、定理37、38、39で、いわゆる「共通概念」の証明をおこなう。これらの定理の証明の要点は、「すべてのものに共通」のものについてならば、神の知性の連鎖から孤立した人間精神にとつても、神の知性の連鎖と同じ観念の連鎖が生じる、という点にある。なぜなら、「すべてのものに共通」のものについては、かりに連鎖に切断が生じたとしても、同じ内容が保存されるからである。だから、人間精神にも真理の認識が可能なのだ。

では、「すべてのものに共通」のものは、いったいどこで認識される

のであろうか。実践的な生の次元においてであろうか。そんなことはありえない。認識主体が何らかの共通のものを捕獲して作り出す「一般概念」は、「共通概念」ではない、とスピノザ自身が注意しているからである（『エチカ』第二部定理40注解1）。それはやはり知的な生の次元においてである。つまり、「すべてのものに共通」のものは、やはり「神の本質」を指すが、それが認識されるのは『エチカ』の証明をとおしてのみなのである。こうして、理性の認識を証明することそれ自体もまた理性の認識であり、そのような認識が行なわれる場所は『エチカ』の中にあるということになる。

このように、『エチカ』第二部は、「理性」の認識がおこなわれる場所として理解することができる。いや、というより、『エチカ』全体が「理性」の認識の場所である。ただし、『エチカ』第五部の後半はそこから除外しなければならない。なぜなら、その部分は「直観知」の認識がおこなわれる場所であると考えられるからである。

4 直観知の場所

「直観知」が語られる『エチカ』第五部後半で、スピノザは次のことを証明している。「第三種の認識」（つまり「直観知」）でものを認識することへの欲望は、「第一種の認識」からは生じないが、「第二種の認識」（つまり「理性」）から生じうる、ということ（『エチカ』第五部定理28）。

「直観知」への欲望が「表象」からは出てこないということは、それ

が認識主体という視点からは出てこないということである。つまり、「直観知」においては、実践的な生の次元で個物とどのように出会うかが問題なのではない。

そうであるとすれば、ここではまったく異なった次元での個物の存在の認識が問題になっているということは明らかである。それは『エチカ』の読解という知的な生の次元で経験される認識であって、『エチカ』の読者が自分の日常生活で実践できる認識のことではない。「直観知」への欲望が「理性」からは生じうるといわれているのは、まさにこの意味においてである。すなわち、『エチカ』において展開する真理の連鎖の中でのみ、人間精神は個物の存在を認識することへと向かっていくことができるのである。このような観点から、『エチカ』第五部後半の諸定理の内容を検討してみなければならない。

人間精神が認識する対象は、現実に存在する人間身体であり、それ以外には存在しない。この点は『エチカ』第二部定理13で証明されており、人間精神に関する諸定理の証明の大前提のようなものである。神の知性においては、人間精神とは人間身体の観念である。しかし、現実に存在する人間精神には、外部からの刺激を原因として自己の身体に生じる「変容」を認識することしか許されていない（『エチカ』第二部定理17）。諸観念の連鎖から孤立しているからである。諸事物が認識に先立って存在するものとして表象されるのは、このように自己の身体に「変容」が起こつてからしかそれらを認識できないからである。すでに見たとおり、自己自身についても、また自己の身体についても同じことがいえる。それが「第一種の認識」である。

ところが、人間精神が真理の連鎖から自己を孤立させたとしても、神

の知性においては、認識が存在を生み出すような仕方でも、人間身体の觀念が依然として存在している。その觀念は「人間身体の本質を永遠の相の下に表現する觀念」（『エチカ』第五部定理22）である。神の知性においては、人間身体を認識することがそれを創造することと同義であるような仕方でも、人間身体が思考されている、という意味である。

しかしながら、真理の連鎖から孤立した人間精神にとっても、この觀念はじつは無関係ではない。なぜなら、人間精神が孤立しているということは、このような真理の連鎖から離脱したということではなく、ただその連鎖が見えなくなっているということを意味するにすぎないからである。ということとは、いったいどういうことになるのであろうか。神の知性の中にある人間身体の觀念は、「人間精神に帰属する何かである」（『エチカ』第五部定理23）ということになる。

人間精神がその「何か」を経験すること、それが「直観知」にはかならない。では、その「何か」とはいったい何であらうか。認識することがそのまま存在することであるような、認識の境地である。「直観知」とは、文字通りそのような境地を生きることである⁽¹⁾。では、なぜそのような境地を生きることができるのであろうか。人間精神が認識主体という視点におのれを置いてある限り、このような境地が生きられることは決してない。むしろ、そのような視点を排除し、実践的な生の次元から知的な生の次元へと移動することが、その条件である。

知的な生の次元とは、繰返していえば、『エチカ』を読解するという知的過程そのものである。この次元においては、すでに人間精神に関する真理が認識されてきている。つまり、『エチカ』第五部後半までに、すでに「理性」の認識がおこなわれている。上で引用した『エチカ』第

五部定理28において、「直観知」への欲望は「理性」から生じうると述べられているのは、『エチカ』をとおして人間精神に関する真理を認識することから、そのような真理の連鎖の中にある自己自身へと認識が向かっていくということを指していると解釈できる。

事実、このような解釈は「直観知」の定義に合致している。『エチカ』第五部定理25の証明によれば、「直観知」とは「神のいくつかの属性の十全な觀念から諸事物の本質の十全な認識へ進む」。この場合、「神のいくつかの属性」とは、『エチカ』第一部で言及される神の諸属性である。それらの属性のうち、「思惟」と「延長」という二つの属性によって、人間精神に関する「十全な觀念」を連鎖させていくことが、まさしく『エチカ』の論述そのものである。そこから「諸事物の本質の十全な認識に進む」ということは、『エチカ』の第五部後半へ「進む」という読解の過程そのものを指していると解釈できるのである。

では、認識の境地を生きるといふ経験とは、いったいどのようなものなのであろうか。定理23の注解では、「われわれが永遠であることを感じかつ経験する」といわれている。ここに「永遠」といふ言葉が出現していることに注意しなければならない。「直観知」の解釈そのものが、ある意味ではこの言葉の意味をどう理解するかにかかっていると考えられるからである。そこで、これまでの解釈の延長線上で、「永遠である」とは、認識がそのまま存在するような、認識の境地を言い表す概念であると解釈してみよう。この解釈はけっして強引なものではない。『エチカ』第五部定理29注解によれば、「神の中に含まれ、神の本性の必然性にしたがって導き出されるものとして」諸事物を認識するとき、それらの事物を「われわれは永遠の相の下に概念している」と明言されて

いるが、このテキストの中にある「神の本性の必然性」という部分が、認識即存在という創造的局面を指しているという点を、これまでの解釈の延長線上で主張しようと考えられるからである。

このように解釈すれば、なぜこのテキストで「感じかつ経験する」という言葉が使用されているかが理解できる。「感じかつ経験する」ということは、たんに認識されるだけでなく、いわば生きられるということであると解釈できるが、認識による存在の創造は、まさに生きられるほかないものであるがゆえに、ここではこのような言葉が選択されたのである。

このように、自己の存在を一種の創造として感じること、それが「直観知」にはかならない。それは、認識が存在を生み出すことだから、精神がその原因でなければならぬであろう。定理3-1はまさにこの点を指摘する。「第三種の認識は、その形相的原因として、それ自身が永遠である限りにおける精神に依存している」。

また、認識が存在を生み出すということは、その認識が必然的に真であるということの意味している。ということは、この認識においては、自己の存在が全面的に肯定されるということを意味する。だからこそ、この認識からは「与えられうる限り、精神の最高の満足が生じる」(『エチカ』第五部定理27)といわれるのである。

このように、「直観知」とは、「永遠の相の下に」という言葉が連想させるものとは異なり、認識に先立ってすでに存在する本質を捕獲することではない。むしろ、認識、存在、本質が、すべて創造の別名であるような事態こそ、「直観知」によって経験されることなのである。

ところで、定理3-3がよれば、「第三種の認識」はわれわれに喜び

をもたらすが、そこには「原因としての神の観念が伴っている」。つまり、神の観念がなければ「第三種の認識」は得られない。なぜなら、認識が創造であるような神の観念によってのみ、そのような創造の一面である自己の存在が経験されるからである。

すると、「直観知」においては「精神の最高の満足」が経験され、その原因として「神の観念」が認識されることになる。ということは、いったいどういうことになるのであろうか。「精神の最高の満足」は「神への知的愛」(『エチカ』第五部定理3-2系)として経験される、ということになる。なぜなら、自己に喜びをもたらしたものを、精神は愛するからである。ただし、ここで言及される神とは、「直観知」の経験をとおして認識されていなければならない。つまり、神とは、定理3-1において指摘された「それ自身が永遠である限りにおける精神」のことなのである。定理3-6証明では、それは「人間精神によって説明されうる限りにおける神」と述べ直されている。だから、「直観知」においては、人間精神の感じる愛は神の自己愛であることになる(『エチカ』第五部定理3-6証明)。結局のところ、「直観知」においては、人間精神はその個別性を維持したままで神に同一化していると考えられるのである。

では、「直観知」において人間精神が同一化していくことになる神の観念は、もともとどこから得られたのであろうか。実践的な生の次元からではない。というのも、この次元において得られる神の観念が誤謬に満ちたものであるということが、『エチカ』第一部定理1-7注解で、延々と説明されているからである。

真の神の存在とは、『エチカ』第一部で証明されるべきものなのである。『エチカ』第二部の出発点となっている『エチカ』第一部定理1-6

をもういちど引用してみよう。「神の本性の必然性から、無限に多くのものが無限に多くの仕方で（いいかえれば、無限知性によって理解されるすべてのものが）生じなければならない」。この定理で言及されているのは、認識の連鎖がそのまま存在の連鎖であるような神の観念である。このような観念を理解することが、最終的に「直観知」へと導くのである。

以上が、スピノザの「直観知」に関する私の解釈である。私は、真理の認識とは創造にほかならないという視点から、「直観知」がどのような認識であるかを考察してきたが、この視点を展開する枠組みとして、実践的な生の次元と知的な生の次元の区別を設定した。以上の解釈はつねにこの枠組みの中でおこなわれている。それゆえ、私の解釈において、生の次元の区別というこの枠組みは、重要な理論的意味を持っている。そこで最後に、私が提案した解釈を、代表的なスピノザ解釈と対比することをとおして、真理の「創造説」との関連において、この枠組みもつ重要性をより明確にしておく必要がある。

5 諸解釈との対比

(一) 上野修の解釈

「直観知」が達成されるのは、『エチカ』というテキストにおいてであるという視点を、はじめて明確に打出したのは上野修の解釈である⁽²⁾。私の解釈は、この解釈を踏襲している。したがって、この点において、私の解釈がいわゆる二番煎じであるということは否定すべくもない。し

かし、私なりに新しい論点を提示できた部分もある。

上野修の解釈では、ただ「直観知」だけが『エチカ』というテキスト（エクリチュール）において達成されるとされていて、「理性」については同様にとらえられていない。少なくともその点が明確に主張されていない。これに対し、私は「理性」および「直観知」を、ともに『エチカ』の読解をとおして達成される認識として解釈している。この解釈をとれば、「第三種の認識」への欲望は「第一種の認識」からは生じないが、「第二種の認識」からは生じうるという、『エチカ』第五部定理28を明確な意味に解釈することができる。すなわち、『エチカ』というテキストを通読することによってのみ「第三種の認識」すなわち「直観知」が達成できる、という意味に。この解釈は、上野修の解釈と対立せず、むしろその意図をより正確に実現する解釈となっているはずである。

生の次元の区別という解釈上の枠組みをとったことによって、真理の認識を『エチカ』の読解という場所にとらえるという解釈を、「直観知」のみならず「理性」にも拡張することができたのである。

(二) ジル・ドゥルーズの解釈

『エチカ』の大部分が「第二種の認識」すなわち「理性」の視点から書かれているという点を明確に指摘したのはドゥルーズの解釈である⁽³⁾。この点には、私は全面的に賛成している。ドゥルーズが「大部分」という譲歩をつけている意図は、『エチカ』第五部の後半は「第三種の認識」すなわち「直観知」の視点で書かれているから、『エチカ』全体でなく、その「大部分」が「理性」の視点で書かれている、ということである。ところが、ドゥルーズは、このように指摘した上で、「理性」

および「直観知」を、どちらも実践的な生の次元で達成される認識として解釈しているのである。この点で、私の解釈はドゥルーズの解釈と真つ向から対立する。

現実存在する諸事物が相互作用する実践的な生の次元で、「不十全な観念」から出発するしかない人間精神が、まさにその実践的な生の次元で、いかにして「十全な観念」を形成しうるかという問いが、ドゥルーズのスピノザ解釈の中心に位置する⁽⁴⁾。ドゥルーズは、その問いに対する解決の糸口を「喜び」の感情に見出す。すなわち、実践的な生の次元で「喜び」の感情を増大させることによって、受動的な喜びが能動的な喜びに転換し、そこに「十全な観念」が獲得されるのだと論じている⁽⁵⁾。ドゥルーズの解釈においては、すべての認識が実践的な生の次元で理解されようとしているが、このような解釈の方針と、『エチカ』の大部分が「理性」の視点で書かれているという指摘は、両立し難いように思われる。

これに対し、私はむしろ、真理の認識は実践的な生の次元では得られないという思想を、スピノザの哲学の中心に認めることから出発している。スピノザ自身が「第一種の認識」を、「第二種」および「第三種」の真理の認識から区別し、それらを別次元に置こうとしていることは明らかである以上、実践的な生の次元と知的な生の次元を区別することは、『エチカ』読解の枠組みとして不可欠であると考えられるのである。

(三) マルシヤル・ゲルールの解釈

ゲルールの解釈は、「直観知」という認識が、いったいどのようなタイプの認識であるかという点に関わる。ゲルールによれば、「直観知」は「個

別的な本質の個別的な認識」であるか、もしくは「個別的な本質の普遍的な認識」であるかのいずれかである。このように問題を設定した上で、ゲルールは後者の解釈をとる。すなわち、「直観知」とは「個別的な本質の普遍的な認識」であるというのである⁽⁶⁾。

では、この解釈は何を意味しているのであろうか。「直観知」の理論においては、個別的な存在が認識されているのではなく、個別的な存在を認識するということはどういうことなのか一般的に説明されている、ということの意味している。たしかに、理論というのはそういうものである。「直観知」という個物の本質の認識を説明することは、実際に個物の本質を認識することではない。だから、スピノザの「直観知」の理論も一般的な説明であるということになる。普通はそうなのだが、『エチカ』においては事情が異なる。それが私の解釈のポイントである。したがって、この論点に関しては、私はゲルールの解釈にまったく賛成していない。

ゲルールの解釈の背景には、一般的なことしか取り扱わない理論の次元と、もっぱら個別的なことにのみ関わる実践の次元を区別するという枠組みがあるように思われる。しかし、このような枠組みをおして見る限り、「直観知」の意味は正確に理解できない。なぜなら、このような枠組みは、スピノザの真理論によって否定されていると考えられるからである。真理の認識とは創造であると考えなければ、観念が何らの真理基準によらずに必然的に真であるという主張は理解できない。私はこれを真理の「創造説」と呼んでおいた。このような視点は、認識に先立つて存在する対象を、認識主体がいかにして捕獲するかという視点と相反するものである。私はこれを真理の「主体説」と呼んでおいた。

さて、私の考えによれば、ゲルーが暗黙に区別していると思われる、理論の次元と実践の次元は、どちらも「主体説」を前提している。つまり、認識主体による対象の捕獲という視点をとった上で、個別的な対象を捕獲する場合（実践）と、同種の個体群を捕獲する場合（理論）とが区別されているにすぎないのである。ゲルーの誤りは、真理に関する「主体説」を暗黙に前提したために、生の次元を区別できなかったという点に存しているのである。

(四) フェルディナン・アルキエの解釈

アルキエは、スピノザの哲学においては、概念の水準と生きられる経験の領域とが区別されているという点を確に理解している。この区別にしたがえば、「第三種の認識」が概念の水準に設定されているということは明瞭である。ところが、スピノザは概念の水準で成立する「第三種の認識」について、それがあたかも生きられる経験であるかのように語っている。確かに、『エチカ』第五部定理23の注解には、「われわれが永遠であることを感じかつ経験する」という言葉を読取ることができ。そこで、この点について疑問を提出するのがアルキエの解釈である。つまり、たんなる概念の水準における認識は、生きられる経験とは性質が異なるのであり、したがってスピノザがなぜたんなる概念の認識をあたかも生きられる経験のようにして語ろうとするかが疑問だといっているのである⁷⁾。ようするに、アルキエは「第三種の認識」について否定的なのである。無論、「第三種の認識」が生きられる経験でなければならぬという点については、アルキエも認める。しかし、そのような経験が概念の認識という水準において達成されうるといふスピノザの主張に対

しては、懐疑的な解釈を述べているのである。

私の考えによれば、この解釈の問題点は、概念の水準と生きられる経験の領域の区別にある。私自身は、スピノザの哲学に関して、知的な生の次元と実践的な生の次元を区別したが、アルキエの区別は私の区別とは似て非なるものであると考えられる。私が生の二つの次元を区別した目的は、真理の認識が創造であるという視点を、知的な生の次元において主張することによって、「第三種の認識」をまさに生きられる経験として理解することであった。「第三種の認識」においては、認識によって存在が生み出されると考えられる。つまり、そこには存在することそれ自体の経験がある。これに対し、アルキエには、真理の認識が創造であるという視点が見られない。

『エチカ』第五部定理22によれば、神の中には人間身体の本質の概念がある。私の解釈によれば、神においては認識と存在が同一であり、したがってものを認識することはそれを生み出すことでもあると考えられるから、この定理の意味もまたそのように理解されなければならない。これに対し、アルキエは、この定理の意味を、神が人間について持っている概念とのみ解し、人間は概念の水準において、その概念を見出す（再発見する：retrouver）にすぎないとしている⁸⁾。つまり、経験の領域と同様に、概念の水準においても、認識とは認識に先立って存在するものを捕獲することであるという点が、暗黙に認められてしまっているのである。しかし、スピノザの真理論は、このような考えをむしろ否定しているはずである。

このように、アルキエの解釈は、スピノザの真理論を「主体説」の視点で理解したがゆえに、概念の水準において存在そのものが生きられる

という「第三種の認識」の持つ深遠な局面を見逃したのである。

おわりに

以上の考察のまとめとして、あらためて生の次元の区別を問題にしてみなければならぬ。私は、この論文で、実践的な生の次元と知的な生の次元を区別し、「第二種」および「第三種」の認識は、実践的な生の次元ではなく知的な生の次元において達成されるという主張を展開してきた。では、知的な生の次元の特徴とは何であろうか。すでに述べたように、実践的な生の次元とは異なり、この次元には認識主体というものが存在しない、という点がやはり最も重要な点である。真理の認識とは、認識主体による対象の捕獲ではなく、むしろ観念の連鎖として理解されるような、知そのものの自律的な過程なのである。「観念の秩序および繋がり」という『エチカ』第二部定理7に出現する言葉は、このような過程を指している。神の知性を構成するこのような真理の連鎖の中で人間精神を理解することが『エチカ』の構造である。認識に先立って存在する対象の観察にもとづく認識ではなく、対象の存在に依存しない認識の展開によって『エチカ』は形成されている。つまり、『エチカ』とは本来の意味での学的認識の構造を持っているのである。

この点を確認した上で、最後に問うておくべき点は何であろうか。人間精神に関する学的認識が、なぜ『エチカ』と題されているか、という点である。なぜならエチカすなわち倫理学とは、実践的な生の改善を目指していると考えられるからである。とすれば、知的な生の次元での学的認識の成果が、はたして実践的な生の次元に何らかの効果を波及さ

せうるかという点が、以上の考察の延長線上で問われなければならない。無論、この問いに対する答えをこの場で出すことはできない。ここではむしろ、この問いに対してとられるべきアプローチを示し、実際の考察を今後の課題とすることで、論文を締めくくりにする。

私の考えによれば、スピノザが知的な生の次元で述べていることを、まると実践的な生の次元で展開するという、ジル・ドゥルーズが実行した過激なアプローチを模倣する必要はない。むしろ、スピノザ自身にこれら二つの次元を結びつける意図があったかどうかという点を手がかりに、『エチカ』を読み直すべきである。

無論、スピノザにはそのような意図があった、というのが私の解釈である。人間精神に関する学的認識は、実践的な生の次元で達成されることはできない。しかし、実践的な生に間接的に関わることはできる。私の考えによれば、これがスピノザの意図である。というのも、そのような関わりは、真理を認識する人は「死をほとんど恐れぬ」という『エチカ』第五部定理39注解に出てくる言葉から明瞭に読取られるばかりでなく、さらに『エチカ』第四部の「人間本性の型」に関する考察と、第五部の「感情の治療」に関する考察に見出すことができるからである。前者においては、あるべき人間の型を学的認識によって構成してみせることで、その認識をたどる『エチカ』の読者に模倣の欲望を喚起するという意図が読取られる。学的認識が、善き生への欲望を喚起するという形で、実践的な次元に波及するのである。また後者においては、実践的な生の次元で生じる様々な感情を、それらについての学的認識によって治療することが可能であるという点の証明が行なわれている。もしこの点の証明に誤りがなければ、人間精神に関する『エチカ』の学的認識

は、実践的な生の次元で活かされることになるはずである。

このように、知的な生の次元における人間精神に関する学的認識の成果は、スピノザ自身の手で、実践的な生の次元に結びつけられている。このことの意味を掘り下げることによって、スピノザの哲学の全体像はさらに明確になると思われるが、すでに述べたように、この点の探求は今後の課題としなければならない。

凡例

『知性改善論』および『エチカ』の参照箇所は、すべて本文中に指示する。典拠はゲブハルト版スピノザ全集である。SPINOZA OPERA, Heiderberg, 1925

注

- (1) この点について、ブランシュヴィックは次のように述べている。「直観において、思考は緊密に存在と結合しており、思考は存在そのもの *essence*」。 Cf. Brunschvicg(1951) p.118
- (2) 上野 (1999) pp.152-153, 上野 (2011) pp.158-159
- (3) Deleuze(1968) p.275
- (4) *ibid.* p.201
- (5) *ibid.* p.262
- (6) Guérout(1974) p.459-460
- (7) Alquié(1981) pp.326-327
- (8) Alquié(2003) p.383

文献

Alquié, Ferdinand(1981), *Le Rationalisme de Spinoza*, PUF

- Alquié, Ferdinand(2003), *Leçon sur Spinoza*, La Table Ronde
 Brunschvicg, Léon(1951), *Spinoza et ses Contemporains*, PUF
 Deleuze, Gilles(1968), *Spinoza et le Probleme de l'Expression*, Minuit
 Guérout, Martial(1974), *Spinoza II l'Âme*, Aubier
 上野修 (1999) 『精神の眼は論証そのもの デカルト、ホッブス、スピノザ』
 学樹書院
 上野修 (2011) 『デカルト、ホッブス、スピノザ 哲学する十七世紀』講談社※
 ※『精神の眼は論証そのもの』が文庫化されたもの。